THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.23,61-64,2004

報告書（体育研究所プロジェクト研究）

ハンドボールにおけるアテネオリンピック優勝チームのゲーム分析

Analysis of the Men's Olympic Champion in Athens in Handball

岡本　大*，吉田久士**

Dai OKAMOTO * and Hisashi YOSHIDA **

はじめに

ハンドボールにおけるゲームの様相は時とともに様々な変貌を繰り返してきた。近年では国際大会トップレベルのゲームの展開を直接日本ハンドボール界全体が意識できたのは1997年地元熊本開催においてである。それからわずか10年弱の間に、すなわち日本が世界の檜舞台から遠ざかっている間に、国際レベルのゲーム様相はルールの変更の影響も受けながら大きく変化してきた。具体的には一試合50数回であった攻撃回数がここ数年は70回に達してきていることが示すように、世界のトップレベルの非常に多くのチームがすばやいアップテンポなゲームを展開するようになった。高いレベルの走力により、ダイナミックなプレーを生み出し、ほとんどのチームが高い成功率の速攻をくりだし、またクイックスタートなどの攻撃チャンスを逃さず、得点する機会を増加させようとする傾向に世界のｓ戦術は変化してきている。このチームにおける戦術とはそもそも個々のプレーヤーが所有している技術、体力を最大限に生かし、試合においてチームが最高のパフォーマンスを発揮するために存在している。戦術が決定されるにあたっては、指導者の経験にかたよるものでなく、根拠となるできるだけ多くの客観的な情報が利用されなければならない。その情報が有効にコントロールされ、チームの戦術に反映されているからこそ、理論的に構築された強固なシステムを基礎に世界の強豪国として存在しえるのである。本研究は戦術面に関して、特にアテネオリンピックでゴールドメダルを獲得したクロアチアを中心にシュートという観点から分析し、世界トップのチームパフォーマンスの特徴を客観的データから検討し報告するものである。

方　法

1．分析対象

本研究では2004年アテネオリンピックにおいてベスト4になった、クロアチア、ドイツ、ロシア、ハンガリーの4チームを分析の対象とした。

2．分析方法

国際ハンドボール連盟（International Handball Federation：IHF）のデータより抽出したシュート関連のデータを集計し、シュートエリアおよびシュート成功率に着目し分析を行った。

3．分析項目

(1) チームシュート本数
(2) チームシュート成功率
(3) エリア別シュート本数
(4) エリア別シュート成功率

* 国士舘大学大学院スポーツ・システム研究科（Graduate School of Sport System, Kokushikan University）
** 国士舘大学体育学部（Faculty of Physical Education, Kokushikan University）

結　果

1．チームシュート本数及び成功率

アテネオリンピックにおいてなされた全シュート本数を示したものが表1である。ドイツが最も多くシュートを打っており、4チームでは最小であったロシアとは約100本ものシュート本数差がみられた。これらのシュート数値はどのチームも8試合合計のもので、1試合平均にするとクロアチアが50.6本、ドイツが55.3本、ロシアが44.6本、ハンガリーが48.9本で決勝に進出したチーム、クロアチアとドイツのほうが若干多くシュートをはなっていた。4チーム平均でも1試合約50本のシュート数であり、世界トップのチームは高い確率で攻撃がシュートまで至っていることが確認された。

そのシュート成功率をチームごとに表したものが図1である。クロアチア、ロシアが約60％のシュート成功率で、ドイツは48.9％と他のチームと比べ約10％低い数値であった。シュート本数とシュート成功率を関連させてみると、シュート本数、シュート成功率のバランスのとれた結果がクロアチアチームであった。ドイツチームはシュートを打つ本数が多いがシュート成功率は低く、このことからはまずシュートまで達する攻撃を行うことを重要とする戦術が施行されていることが読み取れ、反対にロシアチームはシュートをはなつ本数は少ないが成功率は高く、シュートの確実性を考慮した戦術をコンセプトとしていることが推察された。シュート結果からもチームそれぞれの特徴が表現されていることがみてとれた。

2．エリア別シュート本数及び割合

チームで行われたシュートをエリアにおいて細かく分析した結果が表2である。それぞれのエリアにおいて4チームがはなったシュート数の分析結果をみてみると、いずれのチームもロングシュートが150本以上で最も多い結果を示した。カットインからのシュートが少なく、サイドシュート、ポストシュート、速攻からのシュートはほぼ同じような本数であった。また表3にチームごとにシュート割合を示し、チームそれぞれがどこからのシュートに強く依存しているか比較した（図2）。

表1　シュート成功率

	クロアチア	ドイツ	ロシア	ハンガリー
全シュート数	405	442	357	390
得点数	238	216	214	219
シュート成功率（％）	58.8	48.9	59.9	56.2

表2　エリア別シュート本数

	クロアチア	ドイツ	ロシア	ハンガリー
サイド	70	74	43	40
ポスト	72	90	65	72
ロング	153	159	157	174
カットイン	23	16	22	24
速攻	62	64	37	57
7m	25	39	33	23
全体	405	442	357	390

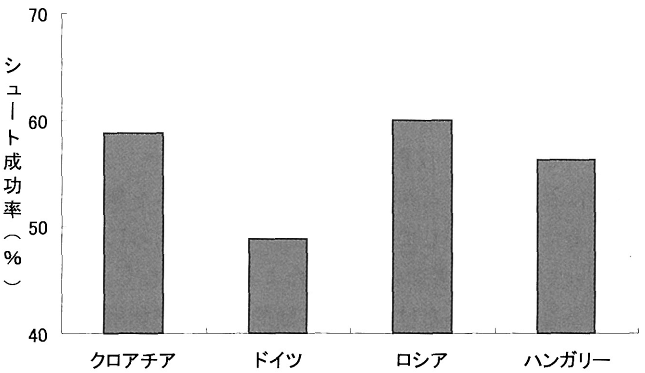

図1　チームシュート成功率

この結果から見られる特徴はクロアチア、ドイツはサイドシュートが約17%を占め、ロシア、ハンガリーより約５%高い割合であった。ロングシュートにおいては反対にクロアチア、ドイツはロシア、ハンガリーと比べ約７%低い割合であった。クロアチア、ドイツは似たシュート傾向を示し、ロシア、ハンガリーと比べロングシュートの分をサイドシュートに依存している特徴がみられた。ポストシュート、カットインシュートにはそれほど差は無く、速攻からのシュートの割合がロシアは他チームと比べ約５%低かった。速攻攻撃はハンドボールにおいて有効な戦術としてとらえられており、そこからのシュート割合が少なかったロシアは別の手段で補う戦略を組み立てていたことが考えられた。

３．エリア別シュート成功率

エリア別シュート割合は前述したような特色があらわれていたが、そのシュート成功率を分析した結果を示したものが表４である。ドイツはいずれのシュートにおいてもその精度が他のチームと比べ低いことが確認された。ロングシュートにおいて４チームともに最も成功率が低く、他のシュートと比べ約20%以上も精度が悪かった（図３）。それぞれのエリアにて４チームで比較してみると、ゴールドメダルを獲得したクロアチアはカットイン、速攻、７mスローにおいて確実にシュートを成功させていることが確認された。前述したシュート割合と関連して考察すると、チャンピオンのクロアチアはシュート成功率の最も低いロングシュートを打つことを最小限におさえ、確実性の高いエリアや速攻からシュートを試行する戦略を実行していることが推察され、それが僅差の勝利の獲得に貢献している可能性が示唆された。ロシアはシュート成功率が高いチームであったがシュートまで至る回数が少なく、クロア

表3　エリア別シュートの割合

	クロアチア	ドイツ	ロシア	ハンガリー
サイド	17.3	16.7	12.0	10.3
ポスト	17.8	20.4	18.2	18.5
ロング	37.8	36.0	44.0	44.6
カットイン	5.7	3.6	6.2	6.2
速攻	15.3	14.5	10.4	14.6
7m	6.2	8.8	9.2	5.9
全体	100	100	100	100

（%）

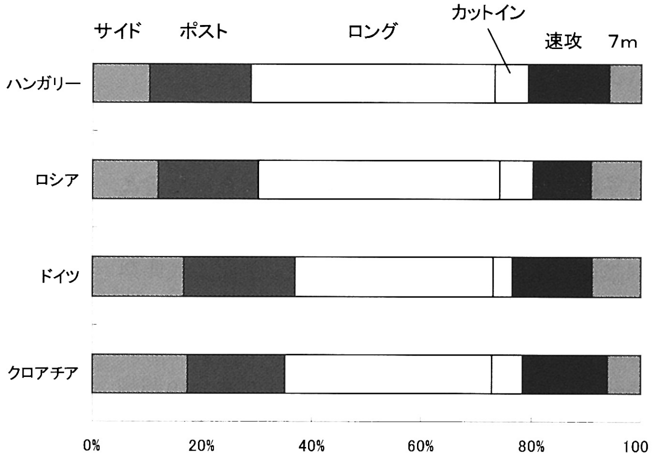

図2　シュート割合

表4　エリア別シュート成功率

	クロアチア	ドイツ	ロシア	ハンガリー
サイド	61.4	47.3	65.1	62.5
ポスト	59.7	56.7	75.4	70.8
ロング	37.3	32.1	40.1	42.0
カットイン	91.3	62.5	86.4	75.0
速攻	87.1	70.3	86.5	71.9
7m	80.0	61.5	69.7	47.8

（%）

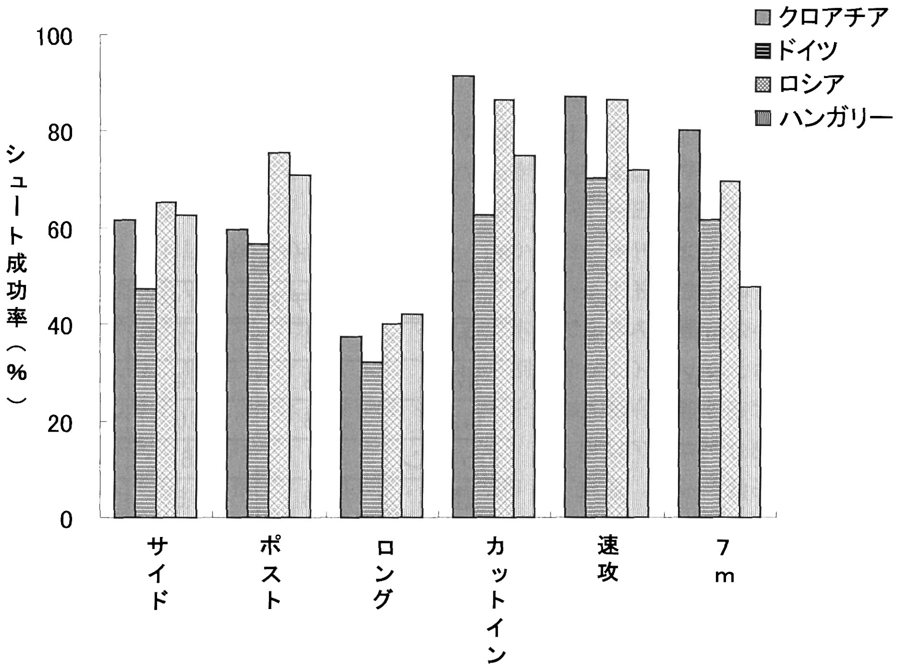

図3　エリア別シュート成功率の比較

チアが最もバランスのとれたチームであったことがシュートの分析から明らかになった。なお、本研究は国士舘大学体育学部附属体育研究所の2004年度研究助成を受けて実施されたものである。